
ヘイト・ブラッド

中二病 番号 20000

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘイト・ブラッド

【Nコード】

N2485U

【作者名】

中二病 番号 20000

【あらすじ】

雷が鳴る。雨は降り注ぎ、アスファルトを濡らす。誰もが寝静まる午前二時、高架線の下を二人の男女が歩く。ただ、一言も言葉を発さずに・・・

『私立 桐明寺高校』を中心とした

『ヴァンパイア事件』

警察も、動いてはいるものまったく犯人の尻尾はつかめないままだった・・・

「それに、私に血を吸う資格なんて・・・無いもの。」

血が嫌いな吸血鬼の話・・・

第一話 榊 匡志 《ゲール》 : 1

雷が鳴る。雨は降り注ぎ、アスファルトを濡らす。誰もが寝静まる午前二時、高架線の下を二人の男女が歩く。ただ、一言も言葉を発さずに……

地面の血溜りを横切り、彼らは今宵の獲物（しちぞう）を目視する。

「……匡志（ただし）……準備は出来てるわね？」

血のように赤い髪をサイドテールにして、壊滅的に目つきが悪い緑色の瞳を少年に向ける。

水色のTシャツにグレーの七部袖パーカーを着て、デニムのホットパンツを着こなす。

首には、逆さ十字のネックレスをかけ、足に履いたスニーカーと白いニーソックスは、すでに紅く染まっていた。

「……………ああ。」

匡志（ただし）と呼ばれた少年は、頷きもせず。ただ、目の前の目標（しちぞう）をじっと見つめ、舌なめずりをする。

黒いジャガードカットソーに黒いテラードジャケット、ベージュのカットパンツに、ライトブラウンのブーツをはいている。

アシンメトリーの黒髪は雨で濡れ、それを鬱陶しそうに手ぐしで整えた。

「
お友達を きょうけつぎ 殺す覚悟は出来た？」

「
とつくの昔に出来てるさ・・・！」

そして、彼は口元を上げて笑う。

それにつられて少女も笑う。微笑んだときに見える犬歯。
それは人間より一回り大きく、血を吸うのに適していた。そう、彼女は吸血鬼だ。

彼らの眼前には、一人の吸血鬼が食事をしていた。
浮浪者のような格好をしたそれは、下品に血を撒き散らし、人間の残骸を貪り食っていた。
そこまで、ランクの高い吸血鬼ではないのだろう。

「そう・・・召し上げれ。」

刹那、少年が駆ける。両手を広げ、吸血鬼に飛び掛った。
指を相手の首にかけ、そのまま食い込ませる。

吸血鬼がようやく襲われたことに気づいた時には、すでに遅かった。

彼の指は、首の肉をえぐり頸動脈ごと引きちぎる。
無論、吸血鬼がその程度で死ぬことはない。

連中を殺すには、日光に当てるか、再生不可能なほど頭部を破壊するほかない。

間髪いれずに、頭部に少年の拳が振り下ろされる。

頭蓋骨にひびをいれ、そこから血の噴水が湧き出る。

しかし、同時に吸血鬼は少年を突き飛ばし、距離をとることができた。

「キサマ、ナにものダ?!」

再生をしながら、吸血鬼が問う。

少年は、質問に答えることもせず。再び駆けた。

「ク、クurnaアアア!」

少年に怯えながら、吸血鬼は詠唱をはじめめる。

「われは地を這い 壁を立て 穿つ者はあらず 我を守護せヨ
『クレイウォール』!」

突如、少年の前に土で出来た壁が幾重にも召還される。

だが、そんなものは妨害にすらならなかった。

いかにも簡単そうに、壁を破りながら、一向にスピードを緩めず近づいていく。

最後の壁をぶち破り、絶望の表情を浮かべる吸血鬼の前に少年が立ちふさがった。

「ずいぶん、往生際が悪いじゃねえか。ご立派に魔術なんか使いやがって。」

少年は、じりじりと詰め寄り、吸血鬼の首を締め上げる。

「キサマ・・・！吸血鬼であるこのオレに対しテ！人間風情ガ！」

「テメエみてエな、クソツタレが吸血鬼なんてたいそうな種族名、名乗るんじゃない。化け物で充分だ。」

「ナんだト！言葉を慎メ！」

汚らしい、唾液と血を飛ばしながら、吸血鬼は怒り狂う。

己の種族に誇りを持つ『吸血鬼』にとって、『化け物』といわれることほど屈辱的なことはない。

「あつそ、そんなことはどうでもいい。それより、まだ質問に答えなかつたな。教えてやるよ。」

首を締め上げる両手に力がこもる。

彼の右手が異形をなす。手のひらは裂けそこから鋭い牙と底なしの口が現れる。腕は黒く変色し、肥大していく。

肥大とともに硬質化していく右腕は、もはや腕とは呼べず。獰猛な犬の顔が出来上がっていた。

「ケルベロス 第一首 解禁」

少年がつぶやくと同時に、ケルベロス『右腕の猛犬』は吠えた。その咆哮は、鈍い響きを持ち、聞く者を震え上がらせた。

「ウ、ア、ア、ア、ウアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

悲鳴を上げ、暴れまわる吸血鬼に、笑みを浮かべ。少年は語りかけた。

「俺の種族はな

「グールっていうんだよ。」

『ケルベロス』は敗北者に頭から齧り付いた。

少年は、肉塊を頬張り飲み込む。服を血と雨でぬらし、近くの人の残骸にも手を伸ばす。

一言も声を発さず。ただひたすら、喰らいつく。

少年が立ち上がったとき、そこには骨のひとかけらも残っていないかった。

「……エレン。人は来ていないな？」

エレンと呼ばれた少女は、きゅうけつき軽くうなづいた。

「いいのか？血は吸わなくて。」

「ええ……いらない。血は嫌い。大嫌い。」

「……………」

「……そうね。しつかり捕まってなさい。」

彼女はそう言うと、背中から黒い炎が噴出し、一對の翼を構築した。蝙蝠のようなそれは、直接背中には付いておらず。単に召喚されたものだ。

「……大丈夫だ。　　^{おまえ}貧乳女は、しがみつきやすいからな。」

「ッ！うっさいわね！失血死するほど吸ってやろうかしら……」

「さっきと言ってることが矛盾してるじゃねえか。つか、もう死んでるんだから無理だっつの。」

溜息をつきながら　　^{グール}少年は　　^{きゅつけつき}少女にしがみつき、二人は飛び去っていった。

『それでは、お昼のニュースをお伝えします。昨夜未明、東京都^{みやさか}住　宮坂　^{えりこ}恵理子さんが失踪。
今朝、搜索願が出されました。警察は、一連のヴァンパイア事件と見て捜査を続けております。』

「なあ、聞いたか？宮坂の姉さん、昨日から家に帰ってこないらしいぜ？」

「ああ、知ってる。知ってる。今日、宮坂の目が死んでたぜ。」

「なあ、今から宮坂見に行かねえ？」

「やめとけて、さすがにそれはかわいそうだって。」

『私立 きりめいじ 桐明寺高校』

所謂、進学校と呼ばれる類の学園であり、大学進学のため日々勉強する学校である。

もともと、『自由』がモットーの桐明寺高校では、宿題が出ること
はほとんど無く、全て生徒の自習に任せている。

その食堂では、天井に取り付けられたテレビを見たり、そこまで美味しくない学食を食べる生徒でこった返していた。

「宮坂だったら校長室入ってたぜ。なんか警察も一緒だったし。」

「えー！マジで！？ヤベーじゃん！」

「まあ、俺らが首突っ込む問題じゃないよね・・・」

「いやー、気になるわー。」

「だよなー。」

「ヴァンパイア事件・・・なんかやばそうだな・・・」

「ま、オレらが話しても別に宮川の姉さんが帰ってくるわけでもねえんだし。とっとと飯食っちゃおうぜ。」

「だな。」

「・・・で、仕事のほうはどうなった？ エレンⅡセペⅡアルカード。」

「平気よ。犠牲者は一人出たけど、予想の範疇だったわ。匡志^{ただし}も頑張ってくれたわけだし・・・そろそろ報酬の話がしたいのだけれど。」

ソファーに腰を下ろし、両者は話を続ける。

エレンの向かいには、尊大な態度の老婆が座っている。短めの白髪を持ち、上から下まで黒一色の服を着ている。

人によっては、喪中か何かと勘違いされそうなものだ。

「匡志・・・ああ、あのグールのガキか・・・お前が眷属にしたときは、まだ8歳の子供だったな・・・名字のほうは『^{さかき}榊』だったかしらね。」

「・・・ッ！」

ガタン！

エレンが机をたたき立ち上がる。

「私の前でその話をするなッ！」

怒鳴るエレンを見て、老婆は眉をひそめた。

「私の前でその話をするな？ばかばかしい。そもそも原因は、お前の身勝手極まりない行動じゃないか。」

「うつさい！！・・・もういいわ・・・で、報酬は？」

そういわれると、老婆は落ち着いた表情で小さく黒いトランクを取り出し、あける。

その中には、一万円の札束が敷き詰められた。

「現金が1千万、それと輸血用の血液だ。もう保存期間は過ぎているが、腹を壊すことは無いだろう。」

「ありがとう。現金はいただいていくけど・・・血液のほうはいらないわ。」

「やはりな・・・だが、それで大丈夫なのか？」

「私をそんじよそこらの
ばかども三流吸血鬼と同じにしないで。それに」

「
それに、私に血を吸う資格なんて・・・
無いもの。」

第一話 榊 匡志 〈ゲール〉 : 1 (後書き)

作者コメント

このたびは、『ヘイト・ブラッド』をお読みいただき、まことに有難うございました。

この物語は、桐明寺高校を中心に基本シリアスたまにギャグ（作者の気分で完全ギャグになったりする）といった感じで執筆していきます。

ちなみに、作者はモチベーションしだいで毎日更新するときもあれば突然1ヶ月ほど、更新が止まったりと、かなりの気分屋なのでその点はご了承ください。

では次の創作意欲が沸く頃にノシ

第二話 榊 匡志 《ゲール》 : 2

四月下旬の晴れの日、冬に比べればだいぶ日も長くなり夕日が差し込む夕方、

午後6時の裏路地。

不良の溜り場である道を、桐明寺きりめいじの制服を着た少女がとぼとぼと歩いていた。

「よお。宮坂ちゃん」

突然話しかけられ、宮坂と呼ばれた少女は硬直する。

「ど、どうも・・・滝山さんたきやま・・・」

ニキビだらけの薄汚い顔で満面の笑みを作り、滝山という不良は、宮坂に顔を近づけた。

「突然で悪いけどさ、今日の『お友達料』もらってないんだけど。」

『お友達料』

その言葉を聞いた瞬間、宮坂の顔がこわばる。

「宮坂ちゃん、桐明寺行ってるんでしょ？お金持ちなんだろうね、だからさ、

いつもみたいに友達としてお金くれない？」

言い終わる前に、宮坂は地面に頭をこすりつけた。

「ごめんなさい！おねえちゃんが家出しちゃって、家族中がてんてこ舞いで、

お金を持つてくる余裕なんて無かったんです！」

「・・・ハアアア？」

滝山の足が宮坂の頭を蹴りつける。

「そんなこと知るわけねえだろうが！いいからとっと金払えやボケ！」

「うぐっ・・・ごめんなさい・・・」

「ごめんなさいじゃねえだろ、おい！金だせつつてんのが聞こえねえのか！」

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

「耳も聞けねえのか、このくそアマがよお！」

滝山が暴行を続ける。宮坂は頭から血を流しその場に倒れこんだ。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

「・・・チッ」

倒れた宮坂に痰を吐き、長い髪の毛を引っ張りもう一度目を合わせた。

「じゃあさ、今日はいいや。今日だけは勘弁してあげる。」

「本当ですか！」

予想外の発言に、宮坂は心底驚いた。

「うん、今日だけは許してあげるよ。．．．ところで。」

「．．．はい。」

「オレ、今日『溜まってんだよねー』」

「．．．え？」

「金払えないんだろ？じゃあその代わりに犯らせろってこと、宮坂ちゃんおっぱい大きいしさー、ちょっとぐらい良いじゃん。」

言葉の意味を理解したとき、宮坂は頭が真っ白になった。

「や、やめてください！」

「ハア？お友達でもねえのに何様のつもりで口聞いてんだよ。おーい、お前らもこっち来いよ！」

滝山の声と同時に数人の不良が集まってきた。

「なんだったらさ、こいつらも混ぜちゃおうか。」

「！！お願いです！それだけは．．．それだけはいやです！」

「うつせーんだよ！だったらとつと金払えや！」

怒号に宮坂の身がすくむ。

「ごめんなさい。お金だったら・・・お金だったら、明日必ず払います！」

だから、それだけは・・・それだけは・・・」

「あア!？」

数人での殴る蹴るの暴行。宮坂は体を亀のように丸め、耐えるしかなかった。全身の痛みと恐さで思考も回らなかった。

「どうすんだよ!金払うか?それともここで廻されんのか!どっちなんだよ!」

「うつ・・・うつ・・・」

「なんか言えつつてんだろ!」

「ごめんなさい!ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!」

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!」

痛い。恐い。嫌だ。全てがごちゃ混ぜになって、ただただ「ごめんなさい」と許しを請うことしか出来なかった・・・

嫌、もう嫌。早く家に帰りたい、誰でもいい。警察でも、通りすがりでもなんでもいい。

誰か・・・誰か・・・

誰か助けて

「その辺でやめとけよ。どうせ、たいした金も巻き上げてないんだろ？」

声、男の人の声だった。

痛みで目も開けられない絶体絶命のとき、誰かが助けに来てくれた。

「何だデメエ・・・ここがどこか分かってんのか？」

「さてな、少なくともボーイスカウトの集合場所には見えねーな。」

「ハア？なめてんじゃねえぞ！」

やっとの思いで目を開ける。一人の少年が数人の不良と退治していた。

少年は物怖じせずに、声を荒げる不良たちの前で不敵な笑みを浮かべながら、

鬱陶しそうにアシンメトリーの髪を整えた。

「何しに来たかは知らねえけどよぉー、図にのんじゃねえ、しばくぞ。」

「おいおい、お前らは少し考えるって事をしたほうがいいぜ。今のうちに脳細胞分裂させとかねえと、一生馬鹿のままだぜ？」

「うるせーんだよ。オレは今こいつに用があんの

正義のヒーロー気取りか知んねーけどよぉー、なんか理由でもあん

のかよ？おとなしくすつこんでる。」

「・・・あんたら見てたら無性にむかついた。だから殴らせる。・・・コレじゃだめかい？」

言い終わるか、否か。滝山はその少年の胸倉を掴んだ。

「テメエ・・・さっきから聞いてりゃふざけたつらして、ふざけた事言いやがって。
なめてんじゃねえぞコラア！」

「それはこっちの台詞だ。いい加減にしねえと・・・ぶつ殺すぞ？」

少年から発せられる殺気。それは、意識が朦朧としている宮坂ですらはつきりと感じられるものだった。

『自分に向けられたものではない』そんなことぐらいちゃんと分かる。

でも、恐くて恐くて仕方が無い。動悸が激しくなる。鳥肌が立ち、指一本動かすことすら出来なかった。

もし、今この場で少年に立ち向かうというのなら、それはよほど腕に覚えがあるか

ただの馬鹿だ。

あいにく、滝山は馬鹿に分類された。

「畜生があー!!」

大振りなパンチを少年に向けて繰り出す。

多少、運動神経がよければ素人でも避けれそうなものを、まったく無駄の無い動きで受け流し、少年は滝山を蹴り飛ばした。

「・・・・・・・・がぁッ」

おおよそ、2メートル宙に浮いた滝山は、小さい悲鳴を上げて地面とキスをする羽目になった。

自分たちのリーダーを失った不良たちは、一目散に逃げ出して、何人もの不良たちが集まっていた裏路地は、もう少年と宮坂しか残っていないかった。

「おい、大丈夫か？」

宮坂の身を案じてか、少年は宮坂に近づいた。

「・・・・はい、大丈夫です・・・・ごめんなさい。」

宮坂は消え入りそうな声をだし、少年を見上げた。

特に美少年というわけではないが、整った顔立ちをしている。アシンメトリーの黒髪を、再び鬱陶しそうに整えた。

「助けてくださって、ありがとうございます。えっと・・・」

「ただし 匡志。さかき 榊 ただし 匡志だ。」

「はい、榊さん。今日はありがとうございました。わたし、桐明寺高校の宮坂 みやさか 楓 かえで です。」

「なるほど、桐明寺か・・・実は、明日そこに転校することになっているんだ。」

「あ、あした?!だ・・・誰がですか？」

「いや、話の流れ的に俺だろ。」

「そ、そうですね・・・ごめんなさい。」

オジギソウのように頭を下げる宮坂を見て、榊はクスリと笑った。

「とにかく、連中が待ち伏せしてる可能性もある。家まで送ろうか？」

「は、はい。ごめんなさい・・・」

「それと、そのすぐごめんなさいって言う癖。直したほうがいいぞ？」

「はい・・・ごめんなさい。」

「・・・・・・・・・・ハア・・・」

やれやれ、とでもいう風に頭をボリボリかきながら早足で歩く榊を、置いてかれないように宮坂が追いかけた。
もうすでに、夕日は落ちていた。

第二話 榊 匡志 《ゲール》 : 2 (後書き)

ネット環境がないところへ引越したため
1ヶ月ほど更新できませんご迷惑おかけします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2485u/>

ヘイト・ブラッド

2011年10月9日07時52分発行